

発達を学ぶことの意味

——つながることからの出発

鳥取大学

寺川志奈子



大石くんの思い出

毎週日曜日の午後、ひっそりとした小さなビルの一室で、大学生になったばかりの私は、中学生の大石くんの勉強をみていました。大石くんは私をはじめで出会った自閉症の男子です。大石くんは教室に入ってくると、決まって首を大きく振り始めます。からだ全体を揺らしながらの首振りには5分か、10分か続いたでしょうか。実際はそれほどでもなかったかもしれませんが、私にはずいぶん長く感じられました。その間、私はどうかかわったらよいのかわからず、また、どんなふうと話しかけてもまったく耳に入らない様子なので、じっと動きを眺めながら、大石くんが首振りを止めるのを待っているだけでした。

首振りがひとしきり続いた後、大石くんは、こんどは「ドリフは見たか？ 志村けんはなんでおもしろい」と、それは言葉を込めたのですが、大石くんはというと、勉強おしまい」といったいつもの感じで、あっさりと教室から飛び出して行ってしまいました。

こんなあつけないお別れをした後、真冬の夕暮れ、駅までの坂道を、寒さに身を縮めながらコートに両手を突っ込み急ぎ帰っていたときです。前の道を走って横切る少年がいました。大石くんです。教室の外で大石くんと会うのは初めてです。「あれえ、大石くんのお家、こっちなのか？」と尋ねる私の声は耳に届いていない様子で、大石くんは縁石の上を歩いてみたり、走って脇道に入っていくたりと、いろいろと寄り道をしながら、またどこかに飛び跳ねるように行ってしまいました。大石くんが毎週教室までどうやって来て、どうやって帰っているのか知らなかった私は、大石くんはちゃんとお家に帰っているのかな」と案じながら駅に向かっていました。



楽しそうに、独り言のような感じで、いつも繰り返し聞いてきてきました。毎週毎週、前の晩の大人気テレビ番組「8時だよ！ 全員集合」のことを思い出して言っているのです。私は「残念ながら、先生の下宿にはテレビがないから見えないよ」と、これまたいつも決まった返事をしていました。大石くんは、私の返事などまったく意に介さない様子で、この一通りの儀式が終わると、いつもすっと勉強に向かい始めるのでした。勉強をみるといっても、大石くんは私の言っていることを聞いているのかなといった様子で、たまーにちょっとした質問をしてくるだけで、ひとり淡々と演習問題を解き進めていたように記憶しています。

こんな時間が1年余り過ぎ、高校受験の日も近づいて、いよいよ大石くんと勉強するのは最後の日になりました。「今日で私といっしょに勉強するのは終わりだよ。高校受験、がんばってね！」と、私はすこし寂しさも感じながら、熱いエールを送りました。その一瞬のできごとのあと、大石くんはまた走って行ってしまいました。それが本当のお別れでした。そのずっと先には、おそらく大石くんのお祖母さまだと思われる方が、お迎えに来られていたのでしょうか。きびしい寒さのなか、背中を丸めて待つておられました。大石くんは、その日が最後の日だということを実はちゃんとわかっていて、私にお別れをしにきてくれたのでしょうか。その行為の真意はわかりませんでした。ですが、私には、かわりをもととしてもあまり手応えの感じられなかった大石くんが、これまで一緒に過ごした時間を肯定的に受け入れてくれていたように感じられて、心からうれしく思いました。

子どもの「ねがい」に心を寄せる

子どもの行動には必ず子どもなりの理由があります。当時には不思議だとなしか思えなかった大石くんの行動にも、大石くんが理由があったはずはあります。自閉症児が初めての場所や人が苦手なのは、先を見通す力が弱く、そのため未経験の予測できないことに対する不安がより強いからではないかと考えられています。教室に入ってくるとまずは首を振っていた大石くんの常同行動は、今からいつもとはちがう場所でないの気持ちは、自分の好きないつもの感覚に戻ることによつ